

「ベトナム村落の独居高齢者をめぐる家族規範の 形成と実践の複相性：文化人類学的研究」 研究経過報告書

加 藤 敦 典*

要 旨

本研究では、ベトナムの村落地域における高齢者（とくに独居高齢者）に対する扶助について、文化人類学的なフィールドワークを軸にした分析をおこなった。現地調査では「世代間相互扶助クラブ」の調査などを実施した。また「養老（田）」に関する史料調査も実施した。そのほか、ゲスト・スピーカーを招聘し3回の公開研究会を実施した。ベトナムの高齢者ケアのベースとなる「家族」についての基礎的な知見を再検討する必要性を確認するとともに、扶養の「権利」と「義務」に関する法社会学的研究など、新たな課題も見いだすことができた。

キーワード：ベトナム、高齢者、居住形態、ケア、コミュニティ

1 概要

本研究は、ベトナムの村落地域における高齢者（とくに独居高齢者）に対する扶助について、文化人類学的なフィールドワークを軸にした分析をおこなうものである。

近年、ベトナムでは経済成長による人口流出などを背景に村落における高齢者ケアが問題化しつつある。これまでのベトナムの村落では、子どもが高齢者のすぐ近くに住んでケアをおこなっていたため、高齢者が完全に孤立することはなかった。しかし、近年では気軽に頼ることができる家族や親族が近くにいないケースもみられるようになっており、独居高齢者の存在も少しずつ顕在化している。

ベトナムにおける高齢者ケアのおもな担い手は家族である。ベトナムの家族については歴史学、文化人類学、家族社会学、人口学などの専門家による豊富な研究蓄積がある。しかし、これまでの議論はベトナムの家族制度の類型的な理解に焦点を当てる傾向があり、家族による高齢者ケアの動態を分析するための理論的枠組みとしては不十分であった。ベトナムの家族については、儒教的規範のもとでの長男の責任、末子相続的慣行、親族扶養における女性の責任の相対的な高さなど、相反する規範やルールが並存するなか、それらを人々が状況に応じて使い分けたり、逆に受動的に複数のルールに

* 京都産業大学現代社会学部准教授

巻き込まれたりしながら個別的な事情に対処している。このことに注目し、本研究では高齢者の居住形態の選択についても、「規範形成のダイナミズム」と「実践の複相性」という分析枠組みを提示することで、それぞれの状況における実際的な対応を描くことを目標に現地調査と史料調査を実施した。

また、地域高齢者ケアのありかたについては、共産党の宣伝、国家の政策、国際援助団体の取り組みなども深く関与しており、それらの諸アクターが形成する言説や実践的活動についての分析も必要である。そのなかでも、本研究では国際援助団体のもとで展開し政府も関心を寄せる「世代間相互扶助クラブ」(Cau Lac Bo Lien The He Tu Giup Nhau) による地域高齢者ケア活動に注目して聞き取り調査を実施した。

具体的な研究活動としては、学外研究参加者として宮沢千尋氏（南山大学人文学部教授）を迎え、以下に示すとおり、平成 30（2018）年の夏と平成 31（2019）年の春にベトナムでの現地調査と文献調査を実施するとともに、数名のゲスト・スピーカーを招聘して 3 回の公開研究会を実施した。

なお、本研究の成果に基づき平成 31（2019）年度の科学研究費補助金に応募したところ、新規課題として採択されるに至った（「ベトナム村落の独居高齢者をめぐる規範形成の動態と文化実践の再編：人類学を中心に」基盤研究（C）（一般）、課題番号：19K12540、研究代表者：加藤敦典）。

2 現地調査

本研究では、以下の現地調査をおこなった。正式な成果論文の刊行に先立ち、ここでは調査の概要と調査の成果に関する所感を述べることにする。

(1) 夏のベトナム現地調査

研究代表者の加藤は平成 30（2018）年の夏に 11 日間（8 月 9 日～19 日）の日程でベトナムでの現地調査を実施した。ハノイでは、ベトナム社会科学院家族・ジェンダー研究所の仲介を得て、ベトナム高齢者会（Hoi Nguoi Cao Tuoi Viet Nam）を訪問し、「世代間相互扶助クラブ」の展開についての聞き取りを実施した。その後、8 月 14 日～18 日には宮沢氏とともに、研究代表者がこれまで約 15 年にわたり村落調査を実施してきたハティン（Ha Tinh）省ロックハー（Loc Ha）県タックチャウ（Thach Chau）社（「社」（xa）は村落部の最末端行政単位）にて、ふたつの「世代間相互扶助クラブ」を訪問し、ボランティア・スタッフと独居高齢者へのインタビューを実施した。

「世代間相互扶助クラブ」は、当初、USAID などの支援のもと、ベトナム中部の 4 省で試験的に実施されたものである。クラブはおもに行政村の下に位置する集落レベルで組織され、メンバーについては高齢者、貧困層を中心に多世代にわたる構成とすることが決められている。おもな活動としては、メンバーへの低利の融資、生活困難者へのボランティアによる日常生活支援、健康増進運動などを通じた親睦活動などとなっている。ベトナム高齢者会とベトナム女性連合会（Hoi Lien Hiep Phu Nu Viet Nam）がそれぞれ 2 省ずつのカウンターパートに選ばれた。高齢者会の中央組織の幹部によれば、プロジェクトの展開にあたっては属人的な要素が強く、たとえば省の高齢者会長のイニシアティ

ブが強かった省では高齢者会の主導のもとで比較的スムーズに事業が展開したものの、他の省では同じようにはいかなかった、などの温度差がみられたという。現在、ベトナム政府はこのプログラムの全国展開を指示しているものの、当初の4省以外では運動の展開はまだ十分にみられないという。また、都市部での実践例はまだないとのことである。地域の自発的なニーズに即した運動の展開や、都市に居住する高齢者に対するコミュニティ・ケアのありかたが今後の課題になるかと思われる。

ハティン省でのインタビューの際にボランティアの方々が強調していたのは、独居高齢者の生活支援（買い物支援など）については、それまでの近所づきあいの延長線としてゆるやかにとらえ、自分の都合がつかないときには別の近所の人に代わってもらうなどしているという点だった。プロジェクトとしての理念とは別のところで、実際の活動メンバーたちが「適当」にプロジェクトを運用している様子を垣間見ることができた。インタビューをした独居高齢者からは、支援者に対する感謝や不満はとくに示されず、もっぱらみずからの境遇（とくに子供たちによる自分への扱い）についての嘆きを聞くことになった。高齢者たちのこういった悩みは容易には「解決」がもたらされる問題ではないし、このような悩み・怨みの根本的な「解決」は社会事業のなせるものではないように思うものの、「家族」や「共同体」のつながりが強いと言われるベトナムのなかにあって（あるいはだからこそ）、それぞれの人生において孤立感のなかで生きる高齢者の存在をうかがい知ることができた。

(2) 春のベトナム現地調査

研究代表者の加藤は平成31（2019）年の春にも13日間の日程（3月4日～16日）で現地調査を実施した。ハノイでは、ハノイ国家図書館（Thu Vien Quoc Gia Ha Noi）においてハティン省の革命功労者療養・社会福祉センター（Trung Tam Dieu Duong Nguoi Co Cong va Bao Tro Xa Hoi）の設立経緯についての資料などを収集した。その後、ハティン省に移動し、ハティン省労働・傷病兵・社会局（So Lao Dong va Thuong Binh, Xa Hoi）、革命功労者療養・社会福祉センター、ベトナム女性連合会ハティン省支部、ギースアン（Nghi Xuan）県スアンフォー（Xuan Pho）社の「世代間相互扶助クラブ」、およびハティン省医療短期大学（Truong Cao Dang Y Te Ha Tinh）での聞き取り調査を実施した。

革命功労者療養・社会福祉センターにおいては、限られた予算のなか、設備も不十分な状況であったが、スタッフと入居者が近い関係性を保って、穏やかな運営がなされているような印象をもった。ただし、重度の障害をかかえる高齢者の介護に関しては、医療・看護の専門家ではない者の目からみてもきわめて劣悪な設備のもとで介護を実施しているように見えた。民営の養護施設（キリスト教団体などが運営）が少しずつ増えている現状において、公営施設が今後どのような役割を担っていくのが課題であるように見えた。

ギースアン県スアンフォー社の「世代間相互扶助クラブ」は国際援助団体の支援が終了したあとも、伝統芸能の会を組織するなど自律的に活動を維持しており、高齢者たちの自発的な「遊び場」（女性連合会ハティン省支部スタッフのことば）として機能しているように見えた。ただし、このようななか

たちで現地の人々のイニシアティブのもとで活発な活動が維持されているケースはハティン省ではそれほど多くないとのことであった。また、女性連合会ハティン省支部スタッフによれば、新規のクラブの設立にあたっては、初期の活動基金の調達が難しく、あまり積極的な動きは見られないとのことだった。

医療短期大学においては、看護・介護士のグローバルな状況を垣間見ることとなった。多くのラオス人留学生が地方の短期大学においてベトナム語で看護学等を学んでいることに驚きを感じた。他方で、日本に看護師、介護福祉士候補者を送り出すための日本語教育にも熱心に取り組んでいた。同短期大学では敷地内に付属高齢者介護センターを設立する計画があるとのことである。副学長によれば、デイ・サービス・センターを設置したり、施設内での入居者コミュニティの形成を促進する建築的な設計をおこなったりする予定であるとのこと、将来的にベトナムの地方都市における高齢者ケア施設のモデルを提供する役割を果たすことが期待できる。学校としては、外国で看護、介護の現場にたずさわったスタッフたちが将来的にこういった施設や母校の教壇で後進の指導にあたることを期待しているとのことであった。日本を含む先進国における看護、介護人材の需要のピークとベトナムにおけるケアの需要のピークがシームレスにつながることであれば人材供給のギャップが生まれずに済む。しかし、ベトナム側の高齢者ケアの需要をカバーするだけの看護・介護人材が現地で確保できない状況に近い将来に訪れることも懸念される。

いっぽう、宮沢氏は3月18日～27日の日程でハノイ市の漢文字喃研究院（漢籍および字喃資料のアーカイブを所有）において史料調査を実施した。具体的には、「養老」に関連するものと所蔵目録に解説されているものを中心に資料を閲覧・収集した。東南アジア学会中部例会（後述）で発表した老親扶養のための田である「養老」を老親の死後に「忌田」として娘に相続させることに関し、さらに新たな事例を発見することができ、老親の扶養や死後の祭祀に関する娘の重要性を再確認した。また、村の掟である「郷約」のなかに、村の祭礼の際に高齢者と「寂家」に対する優遇規定を発見した。高齢者に対する優遇規定はよく知られているが、「寂家」は初見である。これが独居高齢者あるいは高齢者のみの世帯を指すのかどうか、今後、事例の収集と考察を行っていく必要がある。

3 研究会の開催

本研究では、宮沢氏のほか、ベトナムに関する家族社会学、文化人類学、介護・看護の研究および実務にかかわるゲスト・スピーカーの参加を得て、以下の研究会を実施した。

これらの研究会を通して、家族のライフサイクルの特徴、祭祀と家屋の関係、法規文書等に示される高齢者扶養規範を分析することの重要性、家族・親族をベースとしたコミュニティ・レベルにおける高齢者、障害者ケアの実態、高齢者扶養に関する歴史的分析、東アジア諸社会との比較研究の重要性（とくに朝鮮半島の事例とベトナムの事例の比較可能性）、高齢者扶養にかかわる女性親族（とくに娘）の役割についての研究の必要性などが明らかになった。

(1) 第38回「百越の会」研究会

日時：2018年7月14日（土）

会場：京都産業大学 サギタリウス館2階S201教室

プログラム：

14:00-15:30 報告1

加藤敦典（京都産業大学総合学術研究所／現代社会学部 准教授）

「ベトナムにおける高齢者の居住形態の分析—ケアをめぐる家族／社会規範の形成と変容」

15:30-15:45 休憩

15:45-17:15 報告2

比留間洋一（星城大学 リハビリテーション学部 准教授）

「ベトナムの地域高齢者ケア制度をめぐる動向に関する資料—看護・介護論から」

コメンテーター：宮沢千尋（南山大学人文学部 教授）

(2) 東南アジア学会 第258回中部例会

日時：2018年9月29日（土）14:00～17:00

会場：愛知大学名古屋キャンパス講義棟5階L512教室

タイトル：「ベトナムの村落地域における高齢者ケアをめぐる制度・規範・文化実践の再編成—文化人類学を中心に」

プログラム：

14:00-14:10 趣旨説明 加藤敦典（京都産業大学現代社会学部 准教授）

14:10-14:40 報告1

「ベトナムにおける高齢者の居住形態の分析—家族とケアをめぐる社会規範と文化実践の再編成」

加藤敦典（京都産業大学現代社会学部 准教授）

14:40-15:10 報告2

「ベトナムの高齢者ケア制度・政策の動向」

比留間洋一（星城大学リハビリテーション学部 准教授）

15:10-15:20 休憩

15:20-15:50 報告3

「歴史人類学から見た老親の扶養」

宮沢千尋（南山大学人文学部 教授／京都産業大学総合学術研究所 客員研究員）

15:50-16:00 コメント 岩井美佐紀（神田外語大学外国語学部 教授）

16:00-17:00 ディスカッション

(3) 研究会「ベトナムの障害者・高齢者ケアにおける家族とコミュニティの役割」

日時：12月16日（日）13:30～16:00

会場：静岡県立大学短期大学部 306 教室

プログラム

13:30-13:40 開会あいさつ（静岡大学特任准教授 比留間洋一）

13:40-14:00 イントロダクション「ベトナム北部紅河デルタ村落における高齢者ケアと家族の役割：ナムディン省バックコック村の事例を中心に」（神田外語大学教授 岩井美佐紀）

14:00-15:00 「ビンディン省での介護状況の調査について」（高麗デイサービスセンター グエン・ティ・ビク・チャン）

15:15-16:55 質疑応答

16:55-17:00 閉会あいさつ（京都産業大学准教授 加藤敦典）

共催：科学研究費補助金基盤研究（C）「アジアから見た日本の介護：日本式介護の技能移転の可能性を探る」（研究代表者：天野ゆかり）

とくに（3）の研究会は、介護・看護の専門職の方の知見等を得ることにより、より実践的な観点から研究内容を深める機会とすることを目的に、静岡県焼津市の介護施設で働くベトナム人介護士のグエン・ティ・ビク・チャン（Nguyen Thi Bich Trang）氏に自分の出身地であるビンディン（Binh Dinh）省でおこなった地域社会における介護の実践に関する調査報告をおこなってもらった。一般参加者にもオープンな研究会することにより、研究者のみならず、ひろく県庁職員、介護福祉施設関係者、ベトナム人留学生などの参加を得ることができた。

4 発表リスト

本研究に関連して、代表者の加藤と学外研究参加者の宮沢は以下の業績を発表した（印刷中のものを含む）。

(1) 論文・記事

加藤敦典 2019 「『独居』を選ぶ高齢者—ベトナムにおける家の祭壇と女性」速水洋子編『東南ア

ジアにおけるケアの潜在力—一生のつながりの実践』京都大学学術出版会, 181-201 頁。

(注) 科学研究費補助金 基盤研究 A「東南アジアにおけるケアの社会基盤：＜つながり＞に基づく実践の動態に関する研究」(2013～2016 年度, 研究代表者：速水洋子) の成果の一部として刊行。

加藤敦典 2019 「ベトナムから来日する女性の看護師・介護福祉士候補者たちのライフコースと家族規範—先行研究の整理と展望」『比較家族史研究』33：80-94。

加藤敦典 2019 「福祉オリエンタリズムと人類学—ベトナムの村落における障害者ケアにみる『社会』の弱さ」森明子編『ケアが生まれる場—他者とともに生きる社会のために』ナカニシヤ出版, 72-90 頁。

(注) 国立民族学博物館共同研究「家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究—保育と介護の制度化／脱制度化を中心に」(2014 年～2017 年度, 代表者：森明子) の成果の一部として刊行。

加藤敦典 2019 「親密圏とケア」綾部真雄ほか編『東南アジア文化事典』丸善出版。

宮沢千尋 2018 「東アジア女性の財産権に関する研究動向と展望—中国とベトナム」『アカデミア人文・自然科学編』16：93-104。

(2) 発表

Kato, Atsufumi. 2018/05/02 "Cac thanh phan phuc loi xa hoi o cong dong tai Viet Nam va Nhat Ban" (Community care providers in Vietnam and Japan) in the International Conference "Strengthening Social Engagement in Elder Care: Policy and Practical Dialogues among Local communities in Vietnam, Japan, and the United Kingdom" Institute for Family and Gender Studies, Hanoi, Vietnam.

(注) トヨタ財団国際助成プログラム "Strengthening social engagement in elderly care in changing economic and family structure in Asia: Policy and practical dialogues between local communities in Vietnam and Japan" (2016-2018 年度, 代表者：Tran Thi Minh Thi) の活動の一部として実施。

加藤敦典 2018/07/14 「ベトナムにおける高齢者の居住形態の分析—ケアをめぐる家族／社会規範の形成と変容」第 38 回百越の会, 於京都産業大学。

Kato, Atsufumi. 2018/09/26 "Living on the edge: the life world of settlers in a borderland island in Vietnam" (with Noriko Ijichi) at the panel "Mobility, Diversity, and Human Networks: Asian Women's Life Strategies," World Social Science Forum (WSSF) 2018, Fukuoka International Congress Center. Japan. (パネル・モデレーターおよび口頭発表)

(注) 科学研究費補助金 基盤研究 C「アジアにおける女性の移動にともなう生活世界の再編成に関する実証的研究」(2016～2018 年度, 研究代表者：伊地知紀子) の活動の一部として実施。

加藤敦典 2018/09/29 「ベトナムにおける高齢者の居住形態の分析—家族とケアをめぐる社会規範と文化実践の再編成」東南アジア学会第 258 回中部例会「ベトナムの村落地域における高齢者ケアをめぐる制度・規範・文化実践の再編成—文化人類学を中心に」於愛知大学名古屋キャンパス。

宮沢千尋 2018/09/29 「歴史人類学から見た老親の扶養」東南アジア学会第 258 回中部例会「ベト

ナムの村落地域における高齢者ケアをめぐる制度・規範・文化実践の再編成—文化人類学を中心に」
於愛知大学名古屋キャンパス。

5 まとめ

高齢化はベトナムにおいて今後ますます大きな社会問題となっていくことが考えられる。ベトナムにおける高齢者ケアの制度化をめぐる動向をみると、いっぽうで最新の介護施設や介護機器の導入を始めとした「近代化」（ベトナム語では「現代化 (hien dai hoa)」）と、ベトナム語でいうところの「社会化」(xa hoi hoa)，すなわち国家に依存しないケア体制の構築というふたつの方向性が顕著である。また、ベトナムの家族社会学者や看護・介護教育の現場にたつ人々と意見交換をしていると、彼らは国民皆保険制度をはじめとする社会福祉制度の充実が必要だとの見解を示すとともに、ベトナムには家族（とくに女性）によるケアを重視する「伝統」があるため先進国のような重大な高齢者ケアの危機は（当面は）起こらないだろうとの見通しをもっていることがわかる。とはいえ、事態はそれほど楽観的ではないだろうし、ベトナムにおいても家族やジェンダーに関する規範の見直しが進むことが予想される。今後の展開も含め「伝統」「現代化」「社会化」がベトナムにおける高齢者ケアの動向を読み解くためのキーワードになるだろう。

また、ベトナムに特徴的な社会条件として「革命」と「戦争」というファクターも見逃すことができない。ベトナム戦争に勝利した旧北ベトナム側において「革命」や「戦争」に功労のあった高齢者に対する国家や社会による制度的な心配りと、そうでない人々への福祉政策には依然として大きな隔たりがある。国家の正統性という点でこのような優遇措置がとられていることは十分に理解可能であるものの、今後のベトナムの社会福祉のありかたを考えるうえで、時代の要請として、このような対功労者政策としての高齢者福祉という観点からの脱却が求められる日も近いだろう。

日本でもベトナムでも喫緊の社会的要請のもとで高齢者ケアに関する研究活動や各種プロジェクトが展開している。研究者としては、こういった社会問題の解決に即効性をもって応答する提言をおこなう必要があるいっぽうで、そういった活動の基礎となる家族や村落共同体といったベトナム社会に関わる基礎的な事項についての研究の重要性についてもあらためて確認することができた。逆にいえば、高齢者ケアにかかわる各種の実践に関する研究は、ベトナムの社会と文化のより深い理解のための機会を提供してくれるものでもあるということが出来る。

本研究では、当初、理論的な分析枠組みとしてかかっていた「規範形成のダイナミズム」と「実践の複相性」については十分に検討することができなかった。そのほか、今後の研究課題としては、まず第一に、家族のライフ・サイクルと同居・近居・別居の問題、家屋と祭祀の規範と実践などベトナムにおける「家族」についての基礎的な知見のさらなるブラッシュアップが必要である。また、本研究の過程で提示されたあらたな課題として、たとえば、扶養の「権利」と「義務」に関する歴史人類学および法社会学的研究、高齢者にとっての「死に場所」の研究、コミュニティ・ケアの実践に関する事例研究を通したベトナムの村落社会における社会的扶助の強さ／弱さについての分析枠組みの

提示などがあげられる。また、ベトナムから日本に渡航する看護師，介護福祉士（候補者）らの動向を含め，日本を含めたグローバル・ケア・チェーンのなかで，ベトナムの村落における高齢者ケアのありかたを検討することも必要になるだろう。

Progress report: “The formation of family norms and the plurality of practices concerning the care of elderly people living alone in Vietnamese villages”

Atsufumi KATO

Abstract

This study focuses on an analysis of the support provided to elderly people (especially those who live alone) in Vietnamese villages, based mainly on anthropological field research. Our fieldwork focuses on “Intergenerational Self-Help Clubs.” We also research historical material on the “elderly care paddy field (養老田).” We conducted three open sessions regarding the project topic. We reconfirmed the necessity for reviewing basic notions of the Vietnamese “family” as the basis for elderly care as well as recognizing new relevant research topics, such as, from the perspective of the sociology of law, the meanings of “duties” and “rights” as they concern elderly support.

Keywords : Vietnam, elderly people, living arrangement, care, community